

# ホトトギス

十一月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認証第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回)日発行  
平成十七年十一月二日発行(第百八巻第十一号)



# 俳句随想

二百八十二

汀子

今、「NHK俳句」で「ホトトギスを彩った俳人」を取り上げて話している。これまで村上鬼城、飯田蛇笏、原石鼎、渡辺水巴、西山泊雲、鈴木花蓑と続いた。私にとってこれらの俳句を繕く難しさもさることながらそこから伝わってくる虚子の雑詠に於けるなみなみならぬ指導方法が見えて来た。それは私にとつて何よりの収穫であった。

第一黄金時代を築いた鬼城、蛇笏、石鼎、水巴、それに前田普羅まではどちらかと言えば主観の勝った個性的な句が目立つが、そうなると投句する一般の人々の句に安易な小主観の句が目立って来る。それに気づいた虚子は、大正四年に客観写生を説くようになる。それに応じて、西山泊雲、島村はじめ、鈴木花蓑たちの句は忠実に客観写生を守るようになり、後者が大正中期のホトトギス代表作家となった。しかし客観写生が浸透してくるに従つて、一般投句者の句風が平凡になり、つまらなくなってくると、虚子は客観写生の欠点は句が平板になることだと云い、客観写生といつてもそれは主観の範疇にある、主観と客観は表裏一体であると軌道修正する。このようにして主客合一の渾然一体となった境地を目指してホトトギスは四S時代へ向つたのである。

旬日記 汀子

平成十六年十一月一日 ロイヤル俳優  
上京のたびどことなく散る柳  
地震の地の消息問はん暮の秋  
みのししの棲む六甲の窟に住む  
地震鎮めたまへ雨降る暮の秋  
風禍なほ庭にとどめて暮の秋  
十一月三日 関西野分会  
倒木に落葉降り積むばかりかな  
七五三両手遊んでをりにけり  
掃く落葉残す落葉も庭のもの  
仕事又頭切替へ冬近  
被災地の消息落葉降る中に  
十一月三日 下萌旬会  
初霜のありし朝の旅立に  
六甲の野山の錦日々に濃く  
この稿を仕上げて秋を惜むべし  
秋惜む試練乗り越え来し人と  
被災地の野山の錦崩れしと  
十一月三日 悼 竹内留村様  
横川路のこれより炉辺の淋しさよ  
十一月六日 関西ホトトギス同人会  
小鳥来よ地下迷ひ出し交叉点  
秋さぶの名苑として見よとこぞ  
この苑の落葉しぐれを鎮よとこ  
わが記憶迷路露けくありしかな  
落葉先立てて来る風ある順路  
十一月七日 関西ホトトギス俳句大会  
露霜の解ける光を敷き初むる  
水仙の芽を踏みたまふこと勿れ  
十一月九日 大阪倶楽部  
残菊の中より羽音起りけり  
快晴の残菊の香のありしこと  
短日の朝も夕べも星仰ぐ  
聞き馴れぬ声に出てみる冬の鳥

短日の思ひ違ひといふことも  
残菊の中より剪つて来られしか  
十一月九日 綿業倶楽部  
初霜に朝の光を得つゝあり  
初霜の花風の狼籍ありけり庭  
初霜の一画ほどけはじめけり  
旅立の晩間は初霜を踏み  
留守の間に石路咲いてみし旅帰り  
十一月十日 清交社  
稿債を質す立冬とはなりぬ  
新蕎麦といふがもてなし鄙の宿  
木の葉髪せめてとどのへ家居かな  
消息といふも実感なき陽気  
立冬といふも実感なき陽気  
旅心切りかへてゆく冬に入る  
十一月十二日 工業倶楽部  
風の音の去来の窓閉ざす  
大綿に影の存在ありにけり  
母の手と父の手替り七五三  
大綿に遊子の心ただよへる  
風の中の余震のいかばかり  
七五三より解かれたるばかりかな  
十一月十五日 アサヒカルチャー  
新年の原稿依頼冬に入る  
朝の雨止んでのはじまる落葉かな  
十一月十六日 有恒倶楽部  
山茶花の咲き継ぐ日和定まりぬ  
山茶花に庭の春秋語り継ぐ  
山画は小春の富士に置く期待  
旅の日を近づけてある初時雨  
願はくは小春の旅と富士の山  
十一月十六日 仲名会  
背をしやんと伸ばし冬めく街に出る  
老木の山茶花に花新しく  
山茶花や子等の育ちし日々遠く  
客残し出掛けることも冬めく日

旅心全開富士の冬めける  
電球の切れて冬めくシャンデリア  
十一月十七日 夏潮旬会  
地震見舞ふ露けき受話器置きにけり  
虫送りらしき子供の声通る  
長き夜の語り尽きざる地震のこと  
幾度も星を仰ぎて窓夜長  
地震のこと聞けば聞くほど露けしや  
地震の地の露の消息携へて  
冬構濟ませし家も被災地に  
十一月十九日 悼 浅野右橋様  
牡丹の冬芽に未来托されし  
十一月二十五日 きさらぎ会  
しばらくはそのままにして柿落葉  
冬構ともなく整理ははじめけり  
柿落葉拾ふことより客設  
地震の地の冬構とていかばかり  
十一月二十六日 時雨会  
大綿や上下左右に置く視線  
地震の地を覆ひ尽せよ冬紅葉  
どうしてもじつと出来ない七五三  
大綿の光と影の入れ替り  
残されし一樹樾の冬紅葉  
十一月二十七日 旬会と講演の会  
雑炊や被災地に生き行く仲間  
隠すつんと梢点々と冬芽かな  
災害をくぐり来たりし冬芽かな  
十一月二十八日 野分会  
落葉踏む音落葉降る音の中  
普段着む輝いてをり七五三  
落葉降る高さ落葉の舞ふ高さ  
計画の中の麒麟とは寒かり  
十一月三十日 祝「円虹」創刊十年記念  
十年の計百年へ去年今年  
十年の確かな歩み明年  
海展けゆく六甲の初明り

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成十六年十一月三日 一水会

文化の日句友句敵揃ひたる  
初時雨古都の町並艶めきて

十一月四日 蕉心会

外つ国の選挙姦し暮の秋  
末枯るる色も天与でありにけり  
神の旅準備か芭蕉所縁の地  
晩秋の水嵩に船戦きぬ

十一月六、七日 関西ホトトギス同人会、大会

茶白山紅葉は歴史語らざる  
秋惜む関西弁に囲まれて  
秋惜む色を揃へて植木市  
枯蓮の百面相でありにけり  
冬来るやつぱ関西人やねん

十一月十一日 土筆会

大綿に空の黙してをりにけり  
大綿の三次元てふ宇宙かな  
ビルいよよ高く風受け止めし

ビルといふ風拒む一とところ

十一月十五日 NPOみえ

船の水尾てふ冬濤でありにけり  
冬晴に向ひて二十六ノツト  
鷹の句碑見て鷹渡る空を見て

十一月十六日 草木瓜会

天国に近づく都心冬に入る  
立冬の金属音でありにけり  
大根の白さ黒土まで及び  
大根を煮てお母はん元氣どす  
地震の地の輩遙か冬に入る

十一月十八日 登高会

茶の花に風の色付き初めにけり  
茶の花に名苑引き締まつてをり  
木の葉髪極細といふ櫛のあり  
初冬や惑星二つ語り合ひ  
木の葉髪夢にまで見た君なのに

十一月二十、二十一日 岡山囲む会

山の端を紅く染め上げ冬日落つ  
風神の優しく散らす紅葉かな  
一枚の枯葉井原の風に舞ふ  
鏡獅子像冬帝を睨みをり  
全身を投げ出し猫の日向ぼこ

十一月二十二日 若水会

片時雨月に押されてをりにけり  
水鳥の人を拒みし距離であり  
時雨傘一尺前に君が居り  
ボランティア目貼する手のおぼつかな  
五分十六秒前の時雨かな  
水鳥に湖面黙してをりにけり

十一月二十四日 目黒学園句会

時雨傘一本で足る君と僕  
神無月人黙々と働けり  
京といふ時雨の香りありにけり  
鳥居より神有月の明けて来し

十一月二十七日 ホトトギス社句会

冬木の芽日差に解け初めにけり  
十一月二十九日 余呉湖全国俳句大会前夜句会  
源平の対峙するごと鴨の陣  
初鴨に明け渡したる余呉の水  
遠山に日差集めて暮早し  
鏡湖の一穢となりて鴨の水尾

十一月三十日 余呉湖全国俳句大会

鏡湖を磨き上げたる朝時雨  
大会の序曲となりし朝時雨  
鴨の来て湖の存問始まれり

# 雑詠

## 廣太郎 選

生涯に一日のさくら汝が桜  
一すぢの桜の道を歩き出す  
志高く涼しくあれかしと  
滴れる大磐石を押し上げて  
惑星の裏かも知れず五月闇  
小笠解くごとくに枇杷を剥ぎにけり  
春眠の底まで逢ひに来たる人  
ふところの風に塊大夏木  
探りぬる鍵穴といふ五月闇  
蛩とぶ象も隣も寝ねし園  
一草にあづけしいのち糸とんぼ  
足音に一家離散のあめんぼう  
夕茜富士へ打水してをりぬ  
銃眼の見開いてゐる暑さかな  
太陽の塔の猫背となる暑さ  
葛餅は砂糖入れずに冷やすべし  
葛餅も葛饅頭も似たやうな  
花合飲の紅まだうすき宿舎かな

東京 今井千鶴子

同

八尾 岩垣子鹿

同

神戸 山田弘子

同

熊本 竹屋睦子

同

大阪 佐土井智津子

同

樞原 稲岡 長

同

同

葵祭すなはち京の息づかひ  
流鏑馬に常磐木落葉降りかかる  
新茶てふ滴余さず汲みわけて  
ニューヨークの友等と一夜夏料理  
ホトトギス俳人とゐて羅府涼し  
サンフランシスコに入る星月夜  
火を慕ふ弱みのありて火蛾舞へり  
過去話すとき人老いて走馬燈  
一線に繋ぐ一線燕飛ぶ  
卯浪寄す湾末広に千賀の浦  
新樹燃え溶岩流を塞き止めて  
風薫る古き象牙の塔見えて  
降らずとも風にありたる梅雨の冷え  
杉暗き妙義神社や著義の花  
松蟬の中に別なる息遣ひ  
水亭を訪へば遠音のほととぎす  
田植無事済ませし安堵句座に在り  
わが句碑に今日も這ひゐるかたつむり  
水平線大事ヨットの傾ぐため  
清水湧くぶんだけ地球温暖化  
よく冷えるための直角冷奴  
滝開折々祝詞消されがち  
滝開山女放流てふ行事  
滝開すみたるばかり山の雨

枚方 富士みのる

同

熱海 嶋田一步

同

同 嶋田摩耶子

同

仙台 小島左京

同

高崎 吉村ひさ志

同

龍野 浅井青陽子

同

東京 後藤立夫

同

福岡 松尾緑富

同

同

# 雑詠句評（十月号より）

昭代・比奈夫・基子

雅・純也・仁義

暮潮・小木菟・一步

ひさ志・弘子・廣太郎

## 夢の尾を追うて目覚めし藤寝椅子 大阪 大川隆夫

藤寝椅子の置かれている場所は大抵風通しが良く、家の中でも一番居心地のよい処であろう。うとうととまどろみながら、どのような夢を結ばれたのであろうか。読者によつては様々に想像されようが「夢の尾を追うて」という措辞からも恐らく心に残る夢であつたと思われる。私事で洵に申し訳ないが私にも忘れ得ぬ夢が一つある。父の死から丁度一年が経つた時父の夢を見た。兼六園を吟行していた私の前に忽然と現れ「俳句の会か？ じゃあお父さん行くからね。」と柵の向うへ消えていった。思わず「お父さん！」と呼んだ己の声に夢は醒めたのである。掲句はその時の私の心境を甦らせて下さつた。

日頃の願望も夢ならば叶えさせてもらえる。然し所詮現実へと引戻されるのである。藤寝椅子に一人夢の余情を追う作者。現ではなかつた淋しさと空虚さが言外に遺憾なく語られている。

（昭代）

その構造からして涼しい「藤寝椅子」である。きつと感慨深い夢を御覧になつていたのであろう。そんな時の目覚めの様子が余韻を伴つて伝わってくる。涼し風が吹き抜けてくるような情景も想像出来、一時夏の暑さを読者にも忘れさせてくれるような句である。（廣太郎）

## 夏草に岩転がしただけの庭 東京 柴原保佳

夏草は刈つても刈つても生い茂る草。或いは手入れをせずには伸びるに任せてある夏の草。転がしたというのはわざわざ持つて来て転がしたのではなく、以前から転げたのをその儘にしてあるのかと思われる。さてそういう庭を脳裏に描いてみて、季題「夏草」の一面は描かれたかも知れないが、庭の景色のどこに作者が感銘されたのか私には理解しにくい。庭も石も草もみんな哀れでしかないのである。俳句はもう少し風流でありたいと願うからだ。（比奈夫）

最近庭のある家が少なくなり、筆者の家も一戸建てではあるが庭がない。一見荒れた庭のようにも見えるが、「夏草」の生い茂っている様が豊かに見て取れる。「岩転がしただけ」という表現が却つて夏草の姿を見事に修飾している。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

花子選

蜘蛛の囀の大きな穴の吹かれぬる 榎原 稲岡 長  
 玉虫の羽うつくしく死んでをり 同  
 くつきりとわが夕空に虹立てり 東京 今井千鶴子  
 六月の虹よ遊子のたよりとも 同  
 吾が夏行虚子ゆ芭蕉に遡る 豊中 瀧 青佳  
 毎日が此の世の仮寝明易し 同  
 晴つづく空の彼方に水害地 京都 安原 葉  
 藺草刈る一人の音でありにけり 同  
 初夏や様変りせし芝公園 東京 稲畑廣太郎  
 初夏の寺東京タワー従へて 同  
 妹の花火の玉のすぐ落ちて 同 坊城俊樹  
 もの言はぬ参謀本部跡暑し 同  
 川挟む山の国阿波春日落つ 徳島 上崎暮潮  
 帰るたび眉山こたびは花かすみ 同  
 ふと虚子の目をもて蜘蛛の囀を見つめ 神戸 長山あや  
 花合歓や葉を眠らせて星を待つ 同  
 ことのほか濃き紫陽花のこころひく 龍野 浅井青陽子  
 老健を囃されてゐし夕端居 同

花桐を遠目の山湖しづかなる 吹田 宮崎 正  
 山雨来るけはひの青田風騒ぐ 同  
 雨粒を受け止め流し花菖蒲 熱海 嶋田一步  
 おのが色すべてを見せて花菖蒲 同  
 雨上り夏萩のいと濃やかに 福岡 松尾緑富  
 朝夕に五月雨萩の風情見せ 同  
 かかげたる真珠尚び大賀蓮 姫路 桑田青虎  
 共にせしシルクロードの旅涼し 同  
 紫の花が好きらしなめくぢら 龍ヶ崎 今橋真理子  
 なめくぢら銀の迷路に消えてをり 同  
 一人住み梅雨明けてよし明けでよし 東村山 村松紅花  
 花の町深き谷ある城を抱き 同  
 もう戻る人なき門の火取虫 神戸 山田弘子  
 草取にかかる決意のやうなもの 同  
 比叡遠くして万緑の風に立つ 八尾 岩垣子鹿  
 戸一枚翠黛に開け夏炉かな 同  
 俳諧の思川とや梅雨の蝶 東京 吉田小幸  
 築打ちしばかりに雑魚の一尾二尾 同

# 天地有情句評 汀子

蜘蛛の囿の大きな穴の吹かれぬる 樋原 稲岡 長

蜘蛛の囿にはすでに獲物を捉えて格闘した痕跡の大きな穴が開いて風に吹かれている。主も見えない囿に心寄せる作者の目。

六月の虹よ遊子のたよりと 東京 今井千鶴子

仲間であつた藤松遊子さんのことを思い出しながら虹を仰ぐ作者。まるで彼からの便りと思う作者の心情が伝わってくる。

毎日が此の世の仮寝明易し 豊中 瀧 青佳

財界で成功を収められた人生の達人である作者は、毎日をこの世の仮寝と思いつつ早々と目覚める夏の朝の述懐。

晴つづく空の彼方に水害地 京都 安原 葉

作者が今見上げる空はよく晴れているが、その空の彼方には水害で悩んでいる人々が自然と闘っている。中越地震のあつた新潟

に追い討ちをかけるように水害が襲つた。

初夏や様変りせし芝公園 東京 稲畑廣太郎

増上寺、ホテルなどを蔽っている芝公園は比較的緑の多い場所である。ゴルフ練習場やボーリング場が無くなり高いホテルに变身した。

妹の花火の玉のすぐ落ちて 東京 坊城俊樹

線香花火に興じる姉妹の様子が想像される。どちらが花火の玉が長く残せるかと競い合う女らしい雰囲気が素敵。

川挟む山の国阿波春日落つ 徳島 上崎暮潮

吉野川という大河を挟んだ山国阿波が春の一日を終えた太陽が西へ落ちる瞬間を見届ける作者の詩心。

ふと虚子の目をもて蜘蛛の囿を見つめ 神戸 長山あや

「蜘蛛に生れ網をかけねばならぬかな」という虚子の句を心に抱き、虚子の目で作者の目で見ている蜘蛛の営みが想像出来る句。

老健を囃されてぬし夕端居 龍野 浅井青陽子

九十五歳とはとても見えない矍鑠とした作者のさりげない心情の推移の中の一齣。人生の達人の奥義を聞きたい人々が待る。